

「方言をつかわねなんて、おどけでなくいだましいなあ。」

これは、宮城県の方言で「方言をつかわないなんて、とんでもなくもつたいたいなあ。」という意味です。でも、宮城県に住んでいる私の友達はみんなこんな言葉はつかっていません。どうしてつかう人は少ないのでしょうか。

私の祖母と父は場所はちがいますが、どちらも宮城県出身です。そのせいか、自分の兄弟や親などに会った時、方言をつかうのです。「いずい」とか、「〇〇だっちゃ」と。なんだか頭のどこかにある方言スイッチがオンになったみたいに。でも、私や母と話すときはスイッチがオフになります。

また、テレビを見ていても方言をつかっている人がいます。しかし、たいていつかっている人は、いなかの方に住んでいる人、住んでいた人、あるいはお年寄りの人です。みんな方言をしゃべっているときはとても楽しそうです。

日本のなかには各県でそれぞれ独特の個性をもった方言がたくさんあります。おきなわ、高知の土佐、そして一番親しまれているのが大阪です。大阪では子どもから大人までみんなが大阪弁をつかっているようです。有名なのが「なんでやねん」や「めっちゃ」などです。大阪弁は、よくまん才などでもつかわれていますが、宮城弁は宮城の特集のようなものでしかつかわれていません。私は、このことをさびしく感じます。どうして宮城ではかぎられた人しかかわらないのか不思議でなりません。宮城の方言は大阪弁と同じぐらいすばらしいと私は思います。

日本語のなかでも方言は特別なふんいきがあふれています。例えるならば庭のかたすみにさいた花のような感じですか。とてもきれいなのにあまり見てもらえない。それでも生き生きとしている。

私は、方言というものはまほうの言葉なんだと思っています。話せばそれぞれの県の個性がでて、会話ははずむし、いろいろな人に自分を知ってもらうことができます。方言は、今になってつかう人は少ないかもしれませんが、外国語とちがってすぐに話すことができます。私もたまに方言をつかうことがあります。宮城県に住んでいるのだからあたりまえなのかもしれません。しかし、つかっても全然はずかしくはなく、むしろ心が温かくなります。これも方言がまほうの言葉だからだと思います。これから私は方言のことを知り、つかっていきたいです。

今日もどこかで方言の花がひっそりと、また生き生きとさいています。